

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」成果報告書

学校名：岩手県立釜石祥雲支援学校

I 取組の概要

1 はじめに

現在、小学部18名、中学部14名、しゃくなげ分教室7名、高等部26名、計65名の児童生徒が在籍している。

被災した釜石市内に学校はあるが、被災を免れた。しかし、未だ仮設住宅で暮らす生徒もいる。本校舎・高等部校舎周辺地域には仮設住宅もあり、「花のプランター」や「うちわ」を製作し、日頃の支援へのお礼として近隣の仮設住宅や学校所在地の町内会へ届ける活動に取り組んできた。

高等部は平成27年度に釜石高校内に移設し、県内初のインクルーシブ教育の形態として注目を集めている。そして、釜石高校にご協力をいただきながら共同学習や地域への情報発信を続けている。

2 本校および地域の実態

本校舎のある地区は以前より釜石市から土砂災害指定区域に指定されており、大雨時の通学路冠水、陥没、川の氾濫の経験があり常に注意を必要としてきた。

また、三陸自動車道の建設工事が昨年まで校舎に隣接して行われ、開通後も維持管理用道路の工事が続いているため大型工事車両等の往来が激しい。工事に伴って、日常的に児童生徒の散歩コースとして活用してきた地域の生活道路も立ち入り禁止となった。学校生活全般に、これまで以上に児童生徒の安全に留意しなければならなくなったと言える。

本校は市内から離れた山間部にあり、公共交通機関であるバスは、平日一日3往復のみの運行である。また、迂回路のない一本道のため、災害等により通学路が遮断されたりすると、逃げ場を失うことになる。日頃から学校を取り巻く自然環境にも注意を払い、安全な学校生活を心がけている。

3 具体的な取り組み

(1) 防災避難訓練

地震、火災を想定した総合的な避難訓練を年3回実施している。隣接する釜石病院内で学習するしゃくなげ分教室の避難については、本校舎と離れてい

るため、携帯電話を使い情報をやり取りしながら避難している。また、高等部生徒は釜石高校の避難訓練に参加している。

本校舎のある地域は、以前より釜石市から土砂災害警戒区域に指定されており、大雨時の避難などについてもマニュアル化を進めた。防災頭巾・ヘルメットを各教室に児童生徒職員分を用意し全校集会や行事の際に携行している。いまだに震災のトラウマがある児童生徒がおりサイレンや防災無線、小さな揺れ、震災にかかわる映像を怖がったり見たり聞いたりして不安定になったりすることがある。避難訓練が近づくと落ち着かなくなる児童生徒もいる。



(2) 交通安全教室

地域の自動車学校の協力を得ながら実施している。信号機を使用した横断歩道の渡り方や交差点の渡り方について教習所の職員の皆さんに指導していただいている。

(3) 心肺蘇生法・AED講習会

教職員全員が参加し、講義1時間、実技2時間を通して、心肺蘇生法、AEDの操作を確認し、児童生徒の安全について学習した。

(4) 防犯教室・職員防犯訓練

不審者侵入時における校内体制の確認、初期対応の方法を学ぶことをねらいとして訓練を行っている。「不審者が学校に入ってきたら」という内容の事後学習を行い、児童生徒の防犯への意識が高まった。職員防犯訓練では、警察署員に不審者役をお願いし、「さすまた」を使って実践的な訓練を実施した。

(5) 緊急搜索訓練

児童生徒が授業中に行方不明になったことを想定し、行方不明時マニュアルに沿って搜索訓練を実施した。

(6) ゴーヤ大作戦

高等部生徒と釜石高校全日制・定時制生徒が合同で「ゴーヤ大作戦」に取り組んだ。高等部環境委員会が栽培し、「ゴーヤのグリーンカーテン」を釜石高校校舎周辺に設置した。活動を通して、釜石高校生徒との交流の機会を持つことができた。

(7) 学校防災研修会

教職員対象に実施した。大雨を想定しワークショップ形式で研修を行った。実際の災害を想定するなかで職員の防災意識の向上が図られた。



(8) 非常食体験

災害を想定した非常食体験を学部ごとに実施した。カレーライス、乾パン、飲料水を食事体験した。生徒・職員ともに防災への意識の向上を図ることができた。



II 取組の成果と課題

1 成果

東日本大震災の教訓をもとに、様々な自然災害に備えるために、本校の学校経営計画にある防災教育・復興教育に関する内容・ねらいを明確にするとともに、毎年実施している計画については必要に応じて見直しを図り、訓練、体験学習、研修会を推進してきた。それらを通して児童生徒は、災害に対する知識を身につけたり、危機意識や防災への関心の高まりが少しずつでもみられた。

防災教育・復興教育の充実を本校の重点に掲げ、地域に生きる教育として、地域資源を活用しながら様々な学習活動を児童生徒・各学部の実態に応じて取り組むことができた。また、「いわての復興教育」の教育的価値である「いきる」「そなえる」という部分で児童生徒・職員が考えて体験するよい機会となり成果につながったと考える。

2 課題

東日本大震災から9年が経過し、現在は震災時に在籍していた職員が数名しかいない状況になった。いまだに仮設住宅で生活している生徒もいる中でひとりひとりが日常生活でどのように防災意識を持ちながら学校生活・地域生活にとりくんでいか、地域と学校とがどのように連携して防災教育に取り組んでいくかなどが課題として挙げられる。また、学校全体や学部ごとに行われる各訓練や非常食体験などにおいて、児童生徒個別のねらいや目標を定めて具体的な指導・支援計画を明記し、それに対する評価を行い、防災意識の向上へとつなげていきたい。これらのことを今後も継続して取り組むことが課題として考えられる。